

第 9 回プリオン専門調査会での主な議論メモ (未定稿)

1. 欧州委員会科学運営委員会 (ECSSC) での評価報告

欧州委員会科学運営委員会の組織体制や役割、これまでの評価報告事例について、特に特定危険部位のリスト、BSE 検査法の評価、異常プリオンたん白質の体内分布等に関する科学的知見について、山内専門委員より説明の後、質疑応答。主な議論は次のとおり。

ECSSC は、地理的 BSE リスク評価のための方法論 (BSE の侵入 (外的要因) を定量的に、その国内での増幅 (内的要因) を半定性的 (高・中・低) に評価) を策定し、各国のステータス評価を実施。

ECSSC は、消費者を BSE 感染のリスクから保護するためには、人の食物連鎖に感染動物を入り込ませないことが重要との考えから、スクリーニングとして検査を導入し、第二の策として特定危険部位の除去を導入。

検査法の評価では、日本が採用しているバイオラッド法が一番高い検出感度で、ほぼマウスのバイオアッセイに近い感度と評価されている。

と畜解体法の評価では、空気注入法による気絶法は脳組織が血液を介して食肉汚染の危険性を指摘、ピッシングについてもある程度の危険性を指摘。

EU では、30 ヶ月齢を超える牛の BSE 検査を実施している理由として、消費者の不安、加盟国の不十分な安全対策、肉骨粉使用禁止後の出生牛からの BSE の発生、30 ヶ月齢以下の BSE 牛は 1 % 以下であることが挙げられる。

特定危険部位を決定した根拠となる英国の異常プリオンたん白質の体内分布データは、例数の少ない動物での感染実験で得られた結果である。

今後、BSE に関する知見について、不明な点も含めて整理し、不確実性を考慮に入れた議論をすることが重要とされた。

2. 我が国における BSE の発生規模の予測

我が国における B S E の発生規模の予測について、吉川座長より農林水産省の疫学検討チームの報告書を基に説明の後、質疑応答。

BSE によるリスクの考え方として、データの不確実性を明らかにした上で、このような定量的な手法を取り入れ、新たなデータにより検証することが重要であるとされた。